

マッセ・市民セミナー
(NPO法人ちやいどネット大阪共催)

**「子どもの創造的想像力を育む保育者の役割
～『遊び』を通して言葉が育つ～」**

開催日：平成28年6月23日（木）

会 場：泉南市立総合福祉センター 1階大会議室



ちゃいんどネット大阪・マッセOSAKAコラボ研修（泉州ブロック）

「子どもの創造的想像力を育む保育者の役割**～『遊び』を通して言葉が育つ～**

内田 伸子 氏

（十文字学園女子大学特任教授）

今日は、主体的な遊びを通して言葉や創造的想像力が育っていくことを、データを基にしてお話します。

1. 想像力の発達**（1）想像力は生きる力**

私が「想像力は生きる力である」と認識するきっかけになったのは、ユダヤ人の精神科医ヴィクトール・フランクルの『夜と霧』という本です。フランクルは第2次大戦中、ヒトラー率いるドイツ・ナチスがユダヤ人狩りを強行するためにヨーロッパ各地に作った強制収容所に入れられ、つらい囚人生活を送りました。1日に水のようなスープ1杯とパンのかけら一つだけでつらい労働に従事させられ、体が弱ってくるとシャワーを浴びさせてやると言っても毒ガス室に連れていかれ、殺されてしまうという日常で、人々の気持ちはすさんでいきました。

しかし、あるとき収容所の中に希望の光がとまりました。12月24日まで生き延びたら解放されるという噂が流れたのです。人々はその噂を信じて、その日まで一生懸命生きようとしました。12月24日になり、今か今かと解放を待ちわびる人々の耳に届いたのは、あれはデマだったというとても残酷な知らせでした。途端に収容所のあちこちで悲鳴が上がりました。体に何の故障もない若者たちが、あまりのショックに心停止状態になり、亡くなってしまったのです。

なぜこんなことが起きてしまったのか、フランクルは次のように述べています。「人間が強制収容所において、外的のみならず、内的生活において陥っていくあらゆる原始性にもかかわらず、稀ではあるが著しい内面化への傾向があったということが述べられねばならない」。周りが厳し過ぎると、元の平和な暮らしの中に閉じこもり、記憶の中の世界に入ることを「内面化への傾向」

と呼んでいます。

「元来、精神的に高い生活をしていて感じやすい人間は、ある場合には、比較的繊細な感情素質にもかかわらず、収容所生活のかくも困難な外的状況を、苦痛ではあるにせよ、彼らの精神生活にとってそれほど破壊的には体験しなかった。なぜなら彼らにとっては、恐ろしい周囲の世界から精神の自由と内的な豊かさへと逃れている道が開けていたからである。そして、かくしてのみ繊細な性質の人間がしばしば頑丈な体の人々よりも、収容所の生活をよりよく耐えられたというパラドックス（逆説）が理解され得るのである。人はパンのみにて生きるのではない。想像力によって生きる力が与えられる」ということをこの書は訴えています。

（2）第1次認知革命

想像力が働き始めるのはとても早くて、生後10か月のことです。この時期、頭の中に劇的な変化が起こるので、私は「第1次認知革命」と呼んでいます。イメージが誕生し、見立て遊びや、ドレッサーの前でママが髪をとかしていた姿を思い出してまねをする「延滞模倣」などが見られます。これは記憶が働き始めるからです。

脳の記憶をつかさどるのは、タツノオトシゴのような形をしたヒポキャンパス（海馬）であり、情報を知識として記憶貯蔵庫に転送する宅配便の役割をしています。その前のアーモンドの形をしたアミグダラ（扁桃体）では、快・不快感情が喚起されます。赤ちゃんがにこにこ笑っているときや真剣に何かを観察しているときは、扁桃体が快適な感情でいっぱいなので、海馬がよく働きます。

そのときの体験は記憶貯蔵庫に知識としてどんどん蓄えられていきますが、叱られながら勉強したことが身につかないのは、扁桃体が不快感でいっぱいだからです。そこで海馬の働きが抑えられるため、ものが覚えられません。赤ちゃんが楽しそうにしていたり、真剣に何かを見ていたりする時間を、少しでも長く過ごさせてあげてほしいと思います。

第1次認知革命というからには、第2次、第3次の認知革命が児童期までにあります。第1次認知革命は、海馬と扁桃体が働いてイメージが誕生します。第2次は幼児期終盤の5歳後半ごろで、こめかみの後ろの脳新皮質に「ワー



キングメモリー」という情報処理を統括する機能が生まれ、それが海馬や扁桃体とネットワークを作り、プランが生まれます。それから、自分自身の行動を振り返る「メタ認知」の働きが生じます。また、因果関係を推論するための可逆的操作も生まれて、急に成長するわけです。

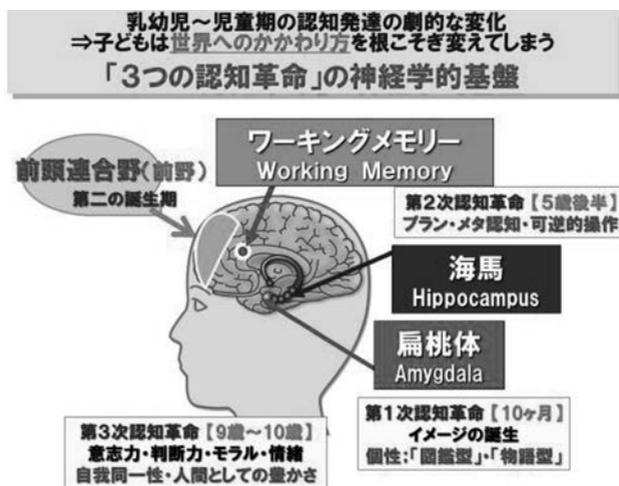


図1 認知革命の神経学的基盤

さらに、第3次は9～10歳ごろに訪れます。前頭連合野に神経細胞のネットワークがたくさん作られ、第2の誕生期を迎え、これ以降、子どもは大人の抽象的な思考段階に入っていきます。意志力、判断力、モラル、情緒、自分は何者かという自我同一性への問い、人間としての豊かさがこの部位で営まれます。この時期に読書することで、自分の目標としたい人に会い、絵本やさらに文字数の多い本の読み聞かせを経て、想像の世界でものを考える力がぐんと育ちます。読書はとても大事な活動で、赤ちゃんのときから保育所でも家庭でも、絵本の読み聞かせに取り組んでほしいと思います。

生後10か月のとき、ものが見えなくなって回り続けるという物理認識が始まります。これらはいずれも赤ちゃんの頭の中で起こる変化ですが、外から見てイメージが誕生したと分かる行動があります。珍しいものを見たとき、「あれは何？」と抱っこしてくれる人の顔を仰ぐことがあります。社会的参照、他者

に問い合わせる行動です。自分では分からないけれど、「ママ、あれは何？」と振り返って問い合わせる行動なのですが、これについて私どもの研究室で研究をした向井美穂さんが博士論文としてまとめたデータを紹介します。

生後10か月の赤ちゃんとお母さん100組に、大学のプレールームに遊びに来てもらいました。赤ちゃんが慣れたところで、それまで見たことのない犬型ロボット「AIBO」を見せます。どの赤ちゃんもびっくりしました。みんな慌ててお母さんのところにハイハイして近寄った後、AIBOを見ているか、それともお母さんに問い合わせるかを観察したところ、お母さんに問い合わせた子どもは62名、残りの38名はお母さんにつかまりながらも目はAIBOにくぎ付けでした。

この子たちが1歳半になったとき、同じ実験をもう一度繰り返してみました。今度は別のデザインのAIBOを持っていきました。子どもにとっては初めて見るものです。1歳半の時期を選んだのは、意味のある言葉が急に出てくる時期であることと、「あんよ」ができるようになる時期だからです。発語と歩行運動には関係があり、立ち上がることによって発語器官が出来上がるので、意味のある言葉を話すようになります。

言葉の習得は、お母さんのおなかの中にいるときから始まります。受胎して18週から聴覚神経系が働き始め、音を拾い始めます。赤ちゃんは、生まれた後に泣いていると「よしよし」に似たような音が聞こえてきます。羊水を通して聞こえる音と空気を通して聞こえる音は違うのですが、リズムやメロディーが一緒なので、赤ちゃんはおなかの中で安心して過ごしていた頃のことを思い出すらしく、泣きやみます。しかし、口はおっぱいを飲むのに適した形をしているので、自分では発語できません。おっぱいを飲んでいる間、理解できる言葉は100語もありますが、立ち上がることによって発語器官が出来上がるので、赤ちゃんはそれまでストックしていた音声素材を自分でも発語するようになるのです。

この実験を繰り返したところ、10か月のときの実験と同じ子ども62名がお母さんのところに慌てて駆け寄り、「ママ」と言って新しいデザインのAIBOやお母さんの顔を見比べました。38名は今度もお母さんのところに近寄るのですが、AIBOが気になって仕方がないらしく、目は犬型ロボットにくぎ付けでした。



こうして発語器官が出来上がり、この子たちは1週間に大体40語もの新しい語彙を獲得する「語彙爆発」の状態になりました。面白いことに、お母さんに社会的参照(問い合わせ)をした子ども62名の発語語彙の60%が、「おいしい」「きれい」や「ばいばい」「こんにちは」「おはよう」などの挨拶言葉や感情表現語でした。この子たちは人間関係に敏感なのではないかと思われたので、気質の検査をしてみたところ、人に敏感であるという特徴が浮かび上がってきました。

お母さんに社会的参照をしなかった子ども38名の発語語彙はほとんどが名詞で、5%だけ動詞が含まれていました。「落っこちた」「行っちゃった」「なくなっちゃった」や、救急車を見ながら「ピーポーピーポー言ってるよ」などで、この子たちはものの変化や動きに興味があるのではないかということで、気質の検査をしてみたところ、確かにものに関心のある気質を持っていました。気質は両親の遺伝情報を受け継いでいるので、同じ夫婦でも、人に敏感な子、ものに興味をひかれる子という両方のタイプの子が生まれます。

この子たちが幼稚園や保育園に行って、どのような遊びを好むのかを観察したところ、社会的参照をした62名の子はままごとが好きでした。絵本のコーナーでは生活絵本や物語絵本を好んだので、「物語型」と名前を付けました。それに対し、社会的参照をしなかった38名の子は、プラレールやKAPLAブロックのように積み木を高く積み上げたり、砂場で穴を掘ってダムを作って水を流したりする遊びが好きでした。絵本のコーナーでは乗り物図鑑、生き物図鑑、食べ物図鑑などの図鑑類が好きだったので、「図鑑型」と名前を付けました。

「図鑑型」には、妊娠中のちょっとした事故で脳に微細な脳損傷を受けたアスペルガー症候群や自閉症のお子さんがあります。「物語型」には、妊娠中の事故で染色体の一部に傷がついてしまったダウン症のお子さんがあります。ダウン症や自閉症などを障害として線引きする人もいますが、私は反対です。これは連続的なものなのです。子どもは多様であり、小さいときほど気質が生のまま出ます。個性の一つとして、どの子どもにも得意なところと不得意なところがあります。定型発達の子でもそうですから、得意分野を伸ばしてあげられるように、個人差を大事にして一人ひとりに寄り添って保育してほしいと思います。

さらに面白いことが分かりました。社会的参照をした62名の8割は女兒で、社会的参照をしなかった38名の8割は男児でした。そこで、次の疑問は、性差はどこからくるのかということです。心理学の分野では、女性の得意な問題解

決分野は、「か」の付く言葉をたくさん言うような言葉の流暢さを測定するような課題や、棒をひっくり返して反対側の溝に並べるような手先の器用さをテストするような課題です。それに対し男性は、図形を頭の中でぐるっと回転しないと正解が得られない一方、紙を対角線で折ったときに重なるような点の打ち方やダーツの成績が高いです。

この特徴を基に、ピース夫妻が『話を聞かない男、地図が読めない女—男脳・女脳が「謎」を解く』という本を2000年にちくま新書から出してベストセラーになりましたが、副題に注目してください。脳の働きは、年齢が高くなるに伴って役割が収束します（局在化）。場所によって働きが違い、左脳は「理性の脳」と呼ばれます。言語、計算、概念、我慢したり、いきなり走り出さずに止まったりするようなことを指令するのは左脳です。それに対し右脳は「感性の脳」です。地図を読み取る、平面から立体を想像する、音楽を聴くなどのときは右脳が活躍します。相手の感情や気持ちを感じ取るのも右脳です。右脳で感じ取った内容を左脳で言葉にするので、普段から左脳と右脳は連絡し、制御し合ってまとまりのある行動をしているわけです。

実は、脳梁の部分は女の子の方が容積が大きいのです。女の子の方が脳の発達がアンバランスだからです。それについて検討したゲシュビントとガラバルダのデータによると、神経活動が始まると神経細胞に樹状突起や軸索が伸び、別の神経細胞にくっついて、信号が何回か通り抜けると、周りにミエリンというタンパク質の膜ができます。このミエリン化した神経細胞がどのくらいあるかによって、神経活動が始まっているかどうかを推定できます。ゲシュビントとガラバルダは雑誌『ネイチャー』で、生まれた直後の脳の成熟を比べると、女の子の左脳は一段と成熟していて右脳は遅れており、男の子の左右の脳は全体的に遅れて女の子の右脳と同レベルであるというデータを発表しました。

男の子の脳の発達がゆっくりなのは、受胎して18週目になると、将来男の子になるxy型の性染色体を持った受精卵に男性ホルモン（テストステロン）が分泌されて、男の子になる準備が始まるからです。従って、成長ホルモンが一時ストップし、男性になるための準備が始まります。

女の子の性染色体はxx染色体で、x染色体はラグビーボールぐらいで丈夫です。それに対し男の子の特性を現す性染色体xy染色体のy染色体は、ピンポン玉ぐらいで傷つきやすいのです。



また、体が大きくならなくても体・心・頭の中で大事な変化や成長が起こっています。発達は見えるものだけをとらえるのではなく、滞っているときや後戻りしているように見えるときも大事な働きが成長していることを心に留めておいてほしいと思います。

生存率から見た傷つきやすさ（被損傷性）の点でも、男の子は遺伝病にかかりやすく、環境ストレスにとっても弱くて、女の子の方が丈夫でストレスにも強いです。男女の生存比を見ると、妊娠時は女性を100とした場合、男性は120で、十分なゆとりを持って着床しますが、誕生のときには106に減ります。その後も男の子は女の子に比べて、病気にかかって亡くなってしまったり、いじめにあって自殺したりするケースが多く、18歳で100対100になります。

その後も男性はストレスに弱いので、中間管理職となる50歳になると95になり、ニコチン中毒、アルコール依存症、うつ病、自殺率のいずれも女性より男性の方が、数字が大きいことが報告されています。67歳で70、87歳で50となり、100歳になると女性5人に対して男性は1人です。女性が長生きなのは、種の保存の観点から見て、とても適応的な形です。女性は生み育む性なので、女性が丈夫であることは人間という種にとっていいことだと思われま

す。平均年齢もどんどん伸びていますが、性差はあります。特に女性は53歳ぐらいになって閉経を迎える準備で女性ホルモンの分泌が悪くなると、一番の影響としては骨にカルシウムが沈着しにくくなり、骨がスカスカになる骨粗しょう症にかかりやすくなります。ですから、元気なうちに風や太陽を浴びて、子どもたちと一緒に運動してください。豆類や豆腐類、海藻類、緑黄色野菜などをしっかり食べて、イソフラボンなど骨にカルシウムを沈着させやすくする栄養素をきちんと取るようにするといいと思います。

女の子は3歳になれば小さなレディーですが、男の子は甘えん坊が多く、スキンシップを求めます。小学校6年生くらいまで甘えん坊なのは男の子です。しかし、そのときにしっかりとスキンシップをし、かわいがって育ててあげれば、第2次性徴のときからぐんと背が伸び、のど仏が下がって低い声でしゃべるようになります。右脳を活用する地図の読み取りなどで、力を発揮してくれるようになります。ですから、女の子に対しては頼もしい女友達のように付き合えますが、男の子にはあまりプレッシャーをかけずにかわいがっていただきたい

(3) 想像は創造の泉

想像力の話に戻ります。見えない未来を思い描くためには材料が必要です。それは五官を使った直接体験や、本で知った疑似体験を合わせた経験です。経験が豊かであるほど、イメージの世界は豊かです。しかし、経験と想像は同じものではありません。目の前の出来事から連想される経験は断片的で不完全ですから、いろいろな経験を合わせたり、足りなければ別の情報を持ってきたりして、まとまりのあるイメージを作り上げる「加工作用」が起こります。鳥を見て飛ぶものを連想して飛行機を発明したライト兄弟のように、創造の可能性があります。想像は創造の泉のようなものです。

2歳5か月と3歳8か月の女の子の前に3枚のカードを置いて、お話し遊びをしてみました。「お話しして」と頼むと、2歳5か月の女の子は「うさタン、ぴょんぴょん」「いてえー、転んだよ。石、転んだ」「えーん、えーん、うさタン、えーん」と泣きまねをしながら語ってくれました。

3歳8か月になると、経験量も半端なく増え、語彙もどんどん成長し、まとまりのあるイメージを作り上げる想像活動が活発になります。「うさこちゃんがお月さんを見てるんだ。ぴょんぴょんしてる。ダンスしてるのかなあ」などと想像しながら解釈を語ってくれました。「うさこちゃんがお月さんを見ながら、楽しくダンスをしていました。上ばかり見て踊っていたので、石ころにつまずいて、水たまりに尻もちをついてしまいました。頭から水濡れになったうさこちゃんは、泣いてしまいました」というように、経験量が増えれば、とても豊かに語れるようになります。

(4) 想像力と暗記能力の関係

ここで想像力と暗記能力の違いを整理しておきます。私たちの思考活動には、「収束的思考」と「拡散的思考」の二つのタイプがあります。

「収束的思考」は、既に獲得した知識や経験を振り返って、加工せずにそのまま取り出せば答えが出てくるような問題を解くときに働いていると考えられます。例えば「アメリカの独立記念日はいつですか」と聞かれて、「1776年7月4日」という正解が得られます。これは覚えたことをそのまま取り出せば答えが出ます。収束的思考は暗記能力ということになります。

「拡散的思考」は、素材は全く同じですが、これを取り出して類推を働かせ、



因果推論を働かせて、まとまりのあるイメージを作るときに働きます。つまり、想像力です。想像力の例として、哲学者の鶴見俊輔さんの例をお話しします。鶴見さんは自分で問題を作り、答えを出そうとして、答えが決まらないときは問題を持ち越します。持ち越して考え続けるのが鶴見さんの流儀でした。第2次大戦中、鶴見さんは海軍の軍属として南方に送られました。運よく人を殺さずに済んだそうですが、戦後も考え続けた問題がありました。「もし、人を殺せと上官に命じられ、逆らえずに殺してしまったとしたらどうしただろう」。何十年も考え続け、晩年になってようやく、「『俺は人を殺した。人を殺すのは悪い』と一息で言えるような人間になりたい」という答えを出しました。

というわけで、その場では答えが出ない、永遠に答えが出ない問題もあるかもしれません。そのようなものを考えているときは想像力、拡散的思考が働いていると考えられます。収束的思考を働かせた結果出てくるのは、知識の再現だけです。しかし、拡散的思考は類推を働かせ、因果推論を働かせて、まとまりのあるイメージを作り上げて、新しい知識が創造されます。暗記能力はアチーブメントテストや大学入試センター試験などで測定することができますが、新しい知識が作られる想像力を測定するのはとても難しいことです。

経済協力開発機構（OECD）が教育投資額と教育効果の関連を探るために、世界の15歳6,000名を無作為で選び、学力テストを行っています。OECDの学力テストを「PISA調査」といい、拡散的思考力を測定しています。日本の子どもはなかなかいい成績が取れず、苦戦しています。

また、文部科学省が小6・中3を対象に毎年実施している学力テストがあります。基本的に暗記能力をテストしていますが、B問題（活用力問題）という文章題では苦戦しています。毎年、100点満点中20点前後です。アチーブメント形式では約80点を取っているのが大体クリアしていますが、学力実態調査や学力テストの文章題、活用力問題の結果によると、戦後日本は偏差値主義教育の中で暗記能力ばかりを育ててきて、拡散的思考力を十分に育ててこなかったつけが回り、答えがない問題を一生懸命考えて答えを出すような拡散的思考力は育っていない状況です。

知識や言葉を獲得する入り口となる働きが、類推です。類推とはアナライジングのことで、知識を獲得する手段です。知っていることと目の前の新規の情報を比べて、似ている点と違う点を見分ける推論のことです。



例を挙げると、2歳の男の子が海岸でウニを見つけました。まだ名前を知らなくて、男の子は「ボール」と言って指を指しましたが、ウニに触ろうとはしませんでした。明らかに、違いと似ている点を見分けた行動です。それを聞いたお母さんは「ボールみたいね。ウニっていうの」と言いました。子どもは1回聞いただけで覚えます。次にウニを見つけたときはボールとは言わず、「ウニ、ウニあったよ」と報告します。このように、大人も子どもも類推を働かせ、自分がよく知っていることに関係付けて新しい情報を取り込んでいきます。

子どものつぶやきは類推の宝庫です。3歳の男の子が夕焼け空を見ながら感動して帰ってきました。窓を開けると満月が昇り始めたところでした。イチゴのような赤い月でした。そのようなときの発話です。「ゆうあけこあけ（夕焼け小焼け）の塊だ」。夕焼け空が目の中の月に集まったという類推を働かせてイメージした瞬間のつぶやきです。

4歳の女の子は、大きな工場の煙突からもくもくと立ち昇る白い煙を見た瞬間、「ここで雲を作ってたのか。誰が作っているんだろう」と発話しました。5歳の男の子は「お母さんはおばあちゃんから生まれたんでしょ。じゃあ、お父さんはおじいちゃんから生まれたの?」。6歳の女の子は通夜の席で白黒の幕を見て、「パンダはおめでたくない動物なんだね、きつと」とつぶやきました。どうぞ子どもたちのつぶやきに耳を傾けてあげてください。頭の中でどのような思考活動が展開しているのかをのぞく窓のようなものです。

「てい先生」という男性保育士の方は、子どもたちのつぶやきをブログに発表していて、アクセス回数がとても多いことに目をつけた出版社の声掛けで、『ほお…、ここがちきゅうのほいくえんか』というタイトルの本を出しました。

ブログで発表した子どものつぶやきを本の上半分には書き、下半分にはどのような状況で発話がなされたのかという解説が書かれています。ところどころに子どもたちを代弁するような、お母さん、お父さんへのメッセージが書かれています。そのつぶやきも面白いのですが、このタイトルが生まれたのも、4歳の男の子が病気にかかって10日間も保育園をお休みしていたためです。久しぶりに登園したときにうれしくてたまらない一方で、何となく恥ずかしい感じを表した言葉として、このせりふをタイトルにしました。

私が気に入っているメッセージは、「お父さん、お母さんがお仕事で疲れて、おうちに帰ってくると思います。お子さんも同じです。いろいろ楽しい遊びも



していますが、我慢もしています。時にはけんかをしたり、けがをして痛い思いをしたり、悔しかったり、いろいろな思いを保育園でしています。そんな思いを抱えておうちに帰ってきますから、おうちではどうかゆっくりさせてあげてください」というものです。お父さん、お母さんと同じでお子さんも疲れているので、家はゆっくりできる場であるようにという願いを文章にしています。男性保育士で、とてもいいセンスを持っているので、気になりましたらお読みいただけると思います。一昨年のベストセラーです。

（5）語る力の育ち

語る力は、乳幼児期を通してどんどん豊かになります。2回変化があって、1回目の変化は3歳のとき、母語の文法を獲得し、「てにをは」がきちんと付いて、会話に不自由しなくなり、結構達者なことを言います。発達の早い女の子はいろいろな語彙を持っているので、おしゃべりです。2回目の変化は5歳後半に訪れ、談話文法を獲得します。談話や文章の時間的展開を構成する枠組みである談話文法が獲得されると、長い話を語るできるようになります。

私は1980年代にこの研究をしていたのですが、大学の近くの区立幼稚園にお邪魔したのは、9月下旬のことでした。お話し遊びの課題が全部終わったので、部屋に戻って遊びの続きをしてもらおうと思い、「お話し遊びはこれでおしまい。お部屋に戻って遊びの続きをして」と頼みました。すると5歳10か月のタカコちゃんという女の子が慌ててこう言いました。「あのね、私ね、夏休み前にお友達のおうちで絵本作りごっこをしたの。そのとき、お話を作ったんだよ」「何ていうお話？」「『星を空へ返す方法』というの」「へえ、面白そうね。覚えてる？」「うん、覚えてる」「じゃあ、私に聞かせてもらえる？」と頼んでみると、タカコちゃんは「いいよ、聞かせてあげる」と言って、夏休み前に作ったという「星を空へ返す方法」のお話を語り聞かせてくれました。

「星を空へ返す方法」(M・T 5歳10ヶ月)

7月15日はうさぎさんの誕生日です。今日は7月15日、うさぎさんの誕生日だから森の動物たちが集まってきました。そして、みんなで食事しているときにケーキの陰から星が出てきました。星はみんなに言いました。「ほくね、空からおっこっちゃったの。だからね、ほくをね、空に返して」

と言ったら、みんなはびっくりしました。「空に返すって?」「そうさ、ほくは空の星さ」「星?」と、みんなはびっくりしました。

そこで、象は言いました。「おれにまかせてよ」。象はその星を自分の鼻に入れると、勢いよく飛ばしました。それでも星は、おっこってしまいました。そしたら、こんどはみんなで相談をして、うさぎが言いました。「そうだよ、ながーい筐を持ってこようよ。それに星をのせてあげてさ、そしてさ、また、その筐をさ、伸ばしてさ、空までさ、送ってあげるのさ」とうさぎが言うと、みんなは「そうしよう」と言って筐をとってきました。

そのなかでも一番筐が長いのをとってきたのはネズミでした。ネズミは、手がゆらゆらになって、すごく長い筐を持ってきました。みんなでそのさきに星をのせると、土の中に埋めて1日待ちました。そうすると、その筐は、1日だというのに、ぐんぐん伸びて空に届きました。そして、星は空に帰ることができました。

そして、その誕生日がおわったあと、みんなが、家で空を見ると、キラキラ光ってる、とてもきれいな星がありました。みんなはその光ってる星を、きっと落ちてきた星だと思ったのです。おしまい。

きれいな構造の話に仕上がっていると思います。7月15日はうさぎさんの誕生日で、誕生会の始まりが告げられます。誕生会にはつきもののケーキの陰から星が出てくるという事件が起こります。何とか星を空に返してあげようと象さんが飛ばすのですが、うまくいきません。どうしようと、みんなで相談します。うさぎさんの提案で、筐を運んでくることにしました。中でも一番長い筐を、手がゆらゆらになって運んできたのは、みそっかすのねずみ君でした。ねずみ君が運んできた一番長い筐の上に星を載せて、土の中に埋めて1日待ったと語っています。1日だというのに、その筐は天まで伸びて、星は空に帰ることができました。

事件が解決したわけですが、筐は成長が早いという素朴生物学の概念を、幼児期の終わりになるとどの子も持つようになります。タカコちゃんは非常にきれいな構造の話を読っていますが、この子だけが特別ではありません。多くの子どもが年長の2学期ぐらいになると、このようなまとまりのある語りをするようになります。幼稚園や保育園の園長先生に、実験の報告のために書き起こ



したものをもちると、「この子が本当にこれを作ったのですか。すごいですね」と、先生方もご存じでなかったりします。大人がどうしても次の課題を急かせる中で、ゆっくりと子どもの語りに耳を傾けるゆとりがないのかもしれないと思いました。

タカコちゃんは取りわけきれいな構造の話を作っていましたが、絵本の読み聞かせ体験がとても豊富なお子さんでした。幼稚園でも絵本のコーナーで物語絵本などをよく見えていますし、赤ちゃんのときからお母さんが、時にはお父さんが絵本の読み聞かせに注力している家庭でした。そのようなお子さんは、語り豊かな場合が多いという関係もそのとき確認されています。

「1日だというのに筐が天まで伸びて」と言っていますが、「1日だというのに」という逆接の接続助詞は2歳の終わりから出てきます。タカコちゃんは、本当はこんなことは起こらないけど、うその話だからといって、虚構を演出するための手段として逆接の接続助詞を使っています。うそと本当の関係付けには、ファンタジーで夢の中の出来事というカットバック表現が使われることが多いです。

宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』では、ジョバンニが親友のカムパネルラと銀河鉄道に乗って不思議な旅を体験するのですが、それは実は夢の中の出来事だったということが、以下のメッセージで分かります。「ジョバンニは眼をひらきました。もとの丘の草の中につかれてねむっていたのでした。胸は何だかおかしく熱（ほて）り頬にはつめたい涙がながれていました」。このメッセージを聞くと、ジョバンニは眠っていたのか、いつから眠っていたのだろうと思って、過去にさかのぼります。「そうだ。病気のお母さんのために牛乳を買いに来たんだっけ」。牛乳屋のおじさんは留守だから、しばらく待ってしようと思えば草むらに寝転びます。ジョバンニの頭の上には、満天の星がきらめいています。天の川から汽車が降りてきて、ジョバンニはそれに乗り込みます。何と親友のカムパネルラが乗っていました。プリシオン海岸、銀河ステーション、美しい所を旅してまいります。やがて、南十字星が見えた辺りで、貨車の中のお客さんたちが旅支度を始めます。不安になったジョバンニは、カムパネルラに「一緒に行くだろ?」と確認します。最初のうちはうなずいていたカムパネルラがうなずかなくなり、南十字星の下で貨車を降りていってしまいます。カムパネルラが消えた闇に向かって、ジョバンニはその名前を呼び続け、その声で目が



覚めたのが、この瞬間でした。

カットして、過去にさかのぼって、たどり直してまたここに来るのが典型的なカットバックの演出法です。この作品は、タイタニック号沈没事件で亡くなったお客さんたちを天国にお連れする汽車という設定で描かれています。とても美しい作品ですが、初稿の執筆は1924年ごろ、何度も推敲を繰り返し、賢治が亡くなった後で草稿が発見され、初出版は1934年のことでした。その後、美しいアニメーションにもなりました。宮沢賢治の作品には、美しくて素晴らしい作品が多いです。小学校高学年になったら、お父さん、お母さんも味わいながら、ぜひお子さんに読み聞かせてほしいと思います。

保護者の中には「あなた、字が読めるんだから、自分で読みなさい」という方もいらっしゃいますが、それは間違いです。文字を読むこととイメージを膨らませることの二重の負荷がかかるので、ゆっくりと味わいながら絵本の世界を楽しむには読み聞かせが一番です。私は娘が赤ちゃんの頃から小学6年生まで読み聞かせしたので、彼女は今も活字が大好きです。ジェーン・オースティンの『Sense and Sensibility (いつか晴れた日に)』の文庫本をいつもポケットに入れて読んだりして、とにかく活字が大好きです。

実はカットバック表現は、日本語ではとても表現しにくいそうです。以前、私はスタンフォード大学で、第2言語の英語の習得に母国語の談話構造がどのような影響を及ぼすかという研究をしたことがあります。メイヤーの『frog, where are you?』のような字のない絵本を理解してもらって、その後でお話を作ってもらいます。まず母国語で語ってもらい、1週間後には習得し始めた英語で語ってもらう実験をしたとき、このような例がありました。

カエルが逃げ出しています。カエルを探しにいったのでしょうか。最後にカエルを無事連れて帰るところで終わっているのですが、テープにとったものを書き起こしてみると、韓国語や日本語を母国語とする子どもは、「男の子と犬がベッドで眠っていた。そして、カエルがこっそり逃げ出した」と時系列因果で語りました。それに対し、英語、ドイツ語、フランス語、スウェーデン語、スペイン語、イタリア語、タリシュ語（イランの言語）などインド・ヨーロッパ語族を母語に持つ子どもたちは、日本語や韓国語の子どもたちと全く違っていました。「カエルがこっそり逃げ出した。どうしてか」と、男の子と犬が眠りこけていて、物音に気付かなかったから」と、結論先行の因果律で語る子





がほとんどだったのです。あまりに違うので、データを取って本当に驚きました。

因果律を作るためには、可逆的操作が使われていると考えられます。何歳から使えるかについては多くの研究者がいろいろな実験をしているのですが、一番有名なのはピアジェというスイスの発達心理学者による実験です。7～8歳から可逆的操作が使えると言っているのですが、彼はとても入り組んだお話を再話させて、話の筋がごちゃごちゃにならずに済んだのが7～8歳以降だったので、可逆的操作が使えるのは7～8歳からではないかと推定したのです。

私はこれを追試してみて、大学生でも筋がごちゃごちゃになってしまうので、単純な課題でやれば、もっと早くから可逆的操作が分かっているのではないかと思い、実験してみることにしました。5歳後半では時間概念が成立します。赤ちゃんの頃、幼稚園の自分、小学生の自分、大人の自分、おじいちゃんの自分というふうに、意識の時間軸が過去・現在・未来でしっかりつながるのが年長組の終盤です。

もう一つはファンタジーを好むようになります。モーリス・センダックの『かいじゅうたちのいるところ』が富山房から、林明子さんの『おふろだいすき』が福音館書店から出ています。さらに、図鑑型の子どもが好きな、かこさとしさんの科学絵本『むしばミュータンスのぼうけん』は、口の中の世界と生活世界が行ったり来たりして、カットバックがたくさん使われている作品です。

（6）可逆的操作

このようなものを好きになるということは可逆的操作がもう使えているのではないかと推定し、二つの出来事をつなげました。

「まさおちゃんは大きな石につまずいて転んでしまった。そして、血が出て泣いています」と時系列でつなげてもらう場合と、逆に結果から言い、「まさおちゃんはけがをして泣いています。だって、さっき大きな石につまずいて転んでしまったからです」と、インド・ヨーロッパ語族の子もたちのような語り方をしてもらう場合です。

この条件を比べてみると、どうしても逆行条件は時系列がひっくり返ってしまいます。「本当は芽からアサガオになるんだけどな」「でも、こっちの絵から作れないかしら？」と言うと、「アサガオが小さくなって芽になった」と言っ

たのが年中組の5歳児です。年長組の5歳児もやはり同じで、「こっちからでしょ?」「でも、こっちからお話してできないかな?」と言うと、「アサガオが咲きました。アサガオが咲いて種ができたので、種をまいたら、また芽が出ました」と、小学1年生の直前まで逆行条件が時系列にひっくり返っています。ひっくり返すのは少し技術が要るので、順番に語るより難しかったらしく、成績は低いです。

やはり日本の子どもは時系列談話になじんでいるから、可逆的操作を獲得するのは遅れるのだろうと諦めかけていましたが、あることを思い出しました。2歳後半になると、子どもたちは「だって、〇〇だもん」という言葉を使い始めます。「だって、〇〇ちゃん、僕に貸してくれないもん」などという表現です。この表現を使って、「お人形さんの足が取れちゃった。だって、さっき、みほちゃんとまりちゃんが両方から引っ張りっこしちゃったから」というふう、「だって、さっき〇〇したから」とつなぎの言葉をつけてあげると、引っ張りっこしたのは前に起こったこと、人形の足が取れたのは後に起こったことだと理解させます。3回だけまねして言ってもらったのですが、全員が5歳後半から、順番を変えずに可逆的操作を使ってつなげることができました。仮説が検証されたわけです。

欧米では、年長組（キンダーガーデン）と小学1年の朝の発表会（ショー・アンド・テル）の時間に言語技術（ランゲージ・アーツ）の教育をしています。段落構成法や、論理や根拠を挙げて説明するトレーニングをする時間です。しかし、日本でも韓国でも、そのようなことはしていません。しかも、日本の国語の教科書は物語文が多いので、時系列で書かれていることがとても多く、論説文や説明文が授業内容に入ってくる高学年でも、やはり時系列で書かれています。

そうすると、理科のレポートを書く場合も絵日記のようになってしまいます。論文を書くときには時系列の形式では一人前の論文とはみなされないので、私は卒論の段階になると、結論先行型の作文教育、日本語版の言語技術の教育をします。仮説を書いて、手続きを書いて、結果を書いて、自分の考えを討論としてまとめる構造を教えるのですが、もっと早くからできないだろうかと思い、熊本大学教育学部附属小学校の先生方と「論理科」という日本語版言語技術の教育プログラムを開発しました。



熊本震災がとても心配ですが、昨年11月、熊本市内の小中学校で週2時間ずつ「論理科」に取り組んでもらい、実践の効果を調べてきました。学力テストの活用問題、つまり拡散的思考力を測定する課題の成績が、「論理科」を入れる前と比べて向上したといううれしい結果になりました。

では、論理科に取り組んでいないところはどうかということで、私は光村図書出版の国語教科書の編集委員もしているの、1年生の2学期に「だって、○○だから」という可逆的操作をする接続詞の単元を設けてもらい、とてもいい成果を挙げているようです。

光村図書の教科書を使っていない場合は、普段の会話でもやりようがあります。5歳後半ごろになると、子どもは「どうしてお鼻はにおいをかげるの?」、「どうしてお風呂に入ると手が軽くなるの?」など、「どうして?」というWhy質問をするようになります。これがチャンスです。そのような質問があったとき、親や保育者は知識が豊かなので、「浮力が働いているからだよ」などと答えなさい。そう言っても分かりません。このような質問をされたときは、「どうしてなんだろうね?」「なぜなんだろうね?」と返してほしいのです。

そうすると子どもは考えて、対案を出してきます。「だってさ、お風呂ってあったかいじゃん。下から押し上げているんじゃない?」。いい線をいっています。でも、「それを浮力って言うの」というのはやめてください。「下から押し上げているんじゃない?」と言われたら、「そうかもしれないね。よく思いついたね」というふうに、共感的に受け止めてあげてください。そのような会話の中で、論拠や根拠を挙げて説明する力がついていきます。

(7) 展示ルールの獲得

また、友達が複数いると、人の気持ちが分からない段階から、人の気持ちも分かってわざとやっているときがあることに気付くと思います。いつ頃から他人の気持ちが分かるのか、他人の気持ちを慮っておもちゃを独り占めせずに貸してあげられるようになるのはいつ頃からなのかを見るために、このような実験をしてみました。

「うさこちゃんは赤い色が嫌いなの。うさこちゃんのお誕生日に、おばあちゃんが赤いブーツをプレゼントしてくれたんだって。うさこちゃんは どうする? なんて言う?」。これはディスプレイ・ルール（展示ルール）といいます。う

さこちゃんの視点に立って、人目を気にして振る舞い方を変えることです。

3歳児はすぐに答えてくれます。「いらないよ」「どうして?」「赤きらい」。3歳は分かりやすいです。

4歳児は迷って、「もらう」という子と「いらない」という子が半々です。発達がゆっくりな男の子ほど、「いらない」という答えが多かったです。理由を聞いても、もごもご言っていて、あまりはっきりした答えは得られませんでした。

5歳児はすぐに答えました。男の子も女の子も3歳児とは正反対の答えをしました。「喜んでもらう。ありがとうって言う。だって、せっかくおばあちゃんがくれたんだもん。僕だったらそうするな。でも、僕のおばあちゃんは、うさこちゃんのおばあちゃんじゃないよ。僕の本当のおばあちゃんは、僕のきらいなものはくれないけどね」と単純に人の気持ちが分かります。

この3歳、4歳、5歳の違いから、「物怖じしない3歳児」「恥ずかしがりやの4歳児」「空気の読める5歳児」というニックネームをつけました。発達が滞っているとき、少し後戻りしたように見えるときに、実は大事な力が心と体の中で発達しているのです。だから、「焦らないでください」と言いました。4歳児はまさに第2次認知革命、空気の読める5歳児に向かって頭の中が忙しく働いているので、行動の上では少し引っ込み思案に見えます。

4歳児を担当するとき、まずは見極め、急がず急がせず、「褒める、励ます、(視野を)広げる」の三つのHの言葉を掛けてあげてください。自己中心적입니다から、自分が見えた世界が全てです。「さっきから、お友達待っていてくれるわよ」などというのが広げる言葉掛けの例です。

『灰谷健次郎の保育園日記』から、4歳のてっちゃんという男の子の言葉を紹介します。「てっちゃんはあとからかんがえてるの。だから、はやくおはなしできないの。てっちゃん、いろんなことばおぼえたいの。てっちゃんのあたまにおしゃべりすることいっぱいあるんだから」という思いで、全身を耳にして、周りで交わされるおしゃべりを聞いています。そして自分にとって関心があることを引っ張り込んで、自分の語彙にしていくのです。

つい先週、朝日新聞の「be」の「いわせてもらお」というコラムに、孫や子どもとの面白い会話の投稿が載っていました。2歳の孫娘と57歳のおばあちゃんの会話です。孫娘がおばあちゃんに自分が食べていたおやつを分けてあげた



とき、「おばあちゃん、これおいしい?」「ああ、おいしいね、とってもおいしいね」と答えました。すると、孫娘が「美味なりって感じ?」と言ったそうです。いつの間にこんな言葉を覚えたのかということで投稿されていたのです。

8月の4週目に載っていた例では、64歳のおばあさんと3歳の孫娘の会話が載っていました。お客さまが見えてお茶を出したときに、「粗茶ですが」とおばあさんが言ったそうです。それを聞いていた孫娘は「どうして粗をつけるの?」と聞くので、「お客さまに出すときは粗をつけるの」と教えたそうです。10日ほどたって別のお客さまが見えたとき、孫娘は家猫を抱っこしていました。「かわいい猫ちゃんね」「粗猫ですが」と言ったそうです。

このように少しでも関心があると、ぱっと自分の中に応用して取り込んで、使ってみるのです。平均的な知能を持った5歳児は、1日に20語の新しい語彙を自分のレパートリーに付け加えていくというデータがあります。周りの大人は20語も話さないので、テレビで流れてくるアニメやドラマのせりふ、アナウンサーがニュースを読み上げる原稿の言葉など、少しでも自分に関心があればどんどん取り込んでいき、語彙爆発をしているのが幼児の特徴です。

ですから、先生方もうっかりできません。先生方の打ち合わせの言葉も聞いて、全部取り込んでいきます。ましてや、自分の大好きな先生が語る言葉はどんどん取り込んでいきます。ですので、美しい日本語で話すようにしてほしいと思います。

2. 学力格差は幼児期から始まるか

PISA調査の成績は低く、2012年は少しいい成績でしたが、拡散的思考力は育っていません。全国学力学習状況調査でも、暗記で答えられる基礎・基本問題は約80点を取っていますが、課題は活用力問題です。知識・技能を活用して応用する力がどうも弱く、カリキュラムを改定して臨んだ2010年も活用力は改善しませんでした。2011年からの調査では、2年ごとに理科が入りました。理科も暗記で答えられるものはクリアしていますが、活用力を測定する文章題は全国平均18点と、とても心配な状況です。

(1) 経済格差と学力格差の関係

しかも、文科省は2010年7月28日、幼稚園卒の子どもの方が保育所卒の子ど

もよりも学力テストでいい成績を取っていることをプレス発表しました。そのとき私は、これは本当だろうかとても驚きました。教育社会学者やマスコミは、学力格差は経済格差を反映しているので、保育所に通っている家庭の方が世帯収入が低い家庭が多いからではないかという論評をしました。私は疑問を持ちました。経済格差に隠れて、学力を下げる別の要因があるかもしれないので、媒介要因をきちんと調べてみたいと思い、国から非常に大きな研究費を頂きました。

そこで、経済格差は子どもの発達や親子のコミュニケーションにどのような影響をもたらしているかという問題について調べることにしました。まず、幼児の読み書き能力（リテラシー）の習得に及ぼす文化・社会・経済的要因の影響について検討するために、日本・韓国・ベトナム・モンゴルの大都市の3～5歳児3,000名のリテラシーを個人面接で調査し、保護者や先生方にもアンケート調査をして、家庭環境や世帯収入などを全て調べました。この子たちが小学校になったとき、PISA調査を受けてもらいました。幼児期の暮らし方が、小学校になって学力テストにどのような影響をもたらすかを調べたいと考えたからです。調査結果が全部まとめ、金子書房から出ている『世界の子育て格差一貧困は超えられるか?』に発表しています。

日本の結果を見ると、71文字のひらがなの読みテストの結果は世帯収入と全く関連がありませんでした。2009年の子育て世帯の平均所得691万円を境に、収入が高い世帯と低い世帯に分けて調べましたが、関係はありませんでした。書くテストでは、模写テストを実施し、鉛筆を持って字を書く準備がどのくらいできているかというのも差はありませんでした。

しかし、知能テストの代わりに実施した絵画・語彙検査の成績は、世帯収入の高い家庭の子の方がいいという結果が出ました。もしかすると塾に通わせているからかもしれないと思って調べてみると、確かに習い事をしている子の方が、していない子より語彙得点が高かったのです。

注目すべきは、ピアノ・スイミングなど芸術・運動系の習い事をしている子と、受験塾・英語塾・公文塾など学習系の塾に通っている子との間には、語彙の違いは全くなかったことです。ということは、塾の学習内容が語彙を豊かにしているわけではなく、むしろ塾に通ったり、習い事をしたりすることで、保育園で普段会っている大人とは違った塾の先生や指導員に出会い、遊びながら



もまた別の子どもたちと会うことで、コミュニケーションが多様になるのではないかと推定しました。

塾での学習内容が語彙を豊かにするわけではなく、習い事をするに伴って会話の機会が増え、会話の多様性が増え、違った語彙を習得するチャンスがあるのです。「ダイビングして」「バタフライしよう」「ビート板を持ってきたよ」など、普段の保育園では聞かない言葉に触れることで語彙が豊かになると推定しました。

さらに、塾に通わせると落ちてしまう能力があることも分かりました。それは運動能力です。杉原隆東京学芸大学教授らのグループが全国の3～5歳児9,000名を調査したところ、体操・バレエ・ダンス教室に通っている子や、体操の時間を設けている幼稚園や保育園に通う子の運動能力が優位に低く、運動嫌いもとても多いのです。

原因は、特定の部位を動かす同じ運動をトレーニングとしてやっているの、子どもは面白くないからです。また、例えば跳び箱が2セットしかないために、長い列を作って手遊びしており、説明を聞き流している時間が多く、肝心の動き回る時間が少なくなっているためです。5歳前半までは競争心を持ちませんが、展示ルールが獲得されると、途端に人目を気にするようになります。友達よりできないと嫌になってしまっただけで教室に行きたがらなくなり、運動嫌いになるという悪循環が起こっていることが確認されました。

杉原先生が提案しているのは保育環境です。「登る・渡る・運ぶ・ぶら下がる・走る」ことを要請する環境を用意することです。円形で狭くても、工夫次第で起伏の多い環境を作ることができます。古タイヤやビールケースなどをもってきて階段のように並べ、それをよじ登ったり、木の実を取ったりするような環境が良く、既製品の高価な遊具を設置する必要はないとおっしゃっています。

そして、好きな遊びを自発的に行う中で、運動遊びが楽しくなるように誘ってほしいのです。男性の保育士さんの姿もちらほら見えますが、子どもの遊びはとてもダイナミックに運動遊びが増えるので、とてもありがたいことです。サッカーなどのゲームも男性の保育士さんが指導してくださると、子どもたちは楽しんでやります。子どもの発達を見ながら活動を取り入れていくことに子ども中心の保育の意義があると、杉原先生は報告書で提案されています。

さらに、小学3年生から英語活動が入るため、塾に行かせる親がとても増え

ました。幼稚園や保育園でも、英会話の時間を設けたり、体操の指導者を雇って体操の時間を設けたりしているところが、公私立を問わず、ちらほら見られるようになりました。しかし、小学校や幼児期に英会話塾に行っていた子と行っていない子では、英語学力に差はありません。小学校の英語既修者と未修者の間で、テストの成績に差がないのです。

お茶の水大学附属中学校の英語科の先生と共同で10年間、この研究を進めました。テストの構成はヒアリングが2割、読解問題が8割で、センター試験と同じような構成にしました。1年生の1学期末からテストを受けてもらったのですが、既修者と未修者の間に成績の差は最初から全くありませんでした。既修・未修にかかわらず、家庭での学習習慣がない生徒は成績がどんどん落ちていくことも分かりました。

数学との相関は高いです。国語との相関は1年生の間はありますが、2、3年生になるとなくなります。国語には漢文や古文が入ってきますし、文学史のような歴史的な内容が入ってくるので、ルール学習が中心の英語とは少し異なる内容となり、関連性はないのでしょうか。いくら言葉であっても関連はないという結果でした。

さらに、日本からカナダに移住して現地の幼稚園や保育園に入った子どもたちが、いつ頃から学習言語としての英語を習得するか、学習言語としての英語読解力の偏差値を見たジム・カミンズさんと中島和子さんによる研究データを見てみると、7～9歳の時期に日本の小学校で日本語の読み書きをしっかりと身につけてからカナダに行った子は、現地並みに英語読解力の偏差値をキャッチアップすることが確認できました。さらに、10～12歳の時期までに日本語で母語の土台をしっかりと作った上でカナダに行った子は、次に速やかにキャッチアップし、教科の学業成績も高かったのです。

幼児期から行った子は、立ち上がりはいい成績ですが、家庭では日本語を使っているため、その後は緩慢です。また、学ぶ体験がないので、小学3年生になると、算数を除いてついていけなくなります。やはり母語の土台をしっかりと身につけることが大事で、6年間しっかりと身につけてほしいと思います。

ペンシルバニアで発表された調査結果では、健康な満期出産の子ども1,600名を6年間追跡しました。そのうち3分の1の子の言語発達が遅れ、知能の発達がどんどん遅れていることが分かりました。赤ちゃんのときに何をしていた



のかという生活時間を調べてみたところ、遅れている子の多くは生後6か月から10か月間、早期教育のDVDを見せられていました。ベイベー・バッハやベイベー・アインシュタインなど日本でもやっている方がたくさんいて、1セット40万円もしますが、そのようなものを1時間以上見せられていたのです。

しかし、3年ぐらい後に持ち直した子もいます。この子たちは自分でビデオを操作できるようになると、強烈な音と光の刺激を浴びるのを嫌がって別室に逃げ出したり、自分で操作して消したりするようになり、それで難を逃れていました。

小児神経科の医師クリス・カーティスがニルスという装置を使って脳活動を観察したところ、遅れている子どもたちは言語理解をつかさどるウェルニッケ野が萎縮してシナプスができていないため、特別なサポートが必要であることが分かりました。

親はよかれと思ってやっていることですが、とんでもないことです。教え込みや類似学習を小さい頃になると、百害あって一利なしです。保護者へのニュースレターに今日の講演内容をぜひ書いてお知らせください。間違ったことをして子どもの脳を壊さないでと、ぜひお知らせください。スマホいじりも厳禁です。

私の調査では、幼稚園か保育園かによって語彙の差は一切ありませんでした。しかし、子ども中心の保育をしていて、自由遊びの時間が長い幼稚園や保育所の子どもの語彙得点が高く、ひらがなや英会話、体操の時間など小学1年生を先取りして準備教育をしている私立幼稚園・保育園の語彙得点がとても低い結果が明らかになりました。

（2）しつけスタイルと学力の関係

しつけスタイルとの関連性も出てきました。語彙得点の高い子どもは共有型しつけを受けており、語彙得点の低い子どもは強制型しつけを受けていることが分かりました。共有型しつけとは、親子の触れ合いを大切に、子どもと楽しい体験を共有したいと考え、いつも子どもが喜びそうなことを考え、子どもにたびたび話しかけているスタイルです。共有型しつけをすることで、子どもの読み書きの得点と語彙得点がともに高くなることが検出されました。これは一つひとつの要因を統制しながら、どれが強い関連を持つかを確認した結果で

あり、単純相関ではないので、非常に信頼できる結果です。

強制型しつけとは、するべきことをするまで何度でも事細かに説明し、できるだけ親の思いどおりに育て、言いつけどおりに従わせ、悪いことには罰を与えるのは当然というスタイルです。強制型しつけでは、高所得層であっても読み書きの得点や語彙得点がともに低くなる結果が検出されました。

さらに、この子たちが小学校に入ってPISA調査を受けたところ、幼稚園のときに絵本の読み聞かせが多くて語彙が豊かな子、手先を使う遊びをたくさんしていた子、紙を巻いて細い剣のようなものを作ったり、ブームになった毛糸編みをしたり、折り紙や造形遊びをしたり、レゴブロック遊びをしたりして、手先が器用に動く子の方が、小学校になってからのPISA型読解力テストの成績が高いという結果が検出されました。ソウル、ウランバートル、ハノイでも同じでした。

幼児期に共有型しつけを受けた子ども、遊びを大事にする子ども中心の保育の幼稚園・保育所で育った子どものPISA型学力が高くなったのです。これは希望の持てる結果です。しつけスタイルや保育形態は、親がコントロールできる要因だからです。

すると、文科省が発表したことは一体何だったのかということになります。2010年、認定こども園の構想が発表され、厚生労働省が管轄するか、文科省が管轄するかで綱引きがありました。多分に戦略的な発言で、誤った解釈でした。幼稚園や保育園における保育の質の違いが、小6や中3まで続くとは考えにくいです。世帯の所得格差やしつけスタイルの違いが学力格差につながったのではないかと推定できます。要するに、幼児期に大人が子どもの自発性を大事にした関わり方をしているかどうかが肝心になります。

共有型しつけと強制型しつけで、どのような会話の違いがあるのかを調べてみました。900万円以上の高所得層で、親は4年制大学卒または大学院を修了した高学歴で、専業主婦の家庭200世帯を東京都内で抽出しました。そして、ブロックパズル課題場面における母子の会話を観察しました。積み木を並べて絵を完成させる課題です。もう一つは、大日本図書から出ている『きつねのおきゃくさま』という小学2年生の道徳科の教材を読み聞かせたときの会話を調べました。

すると、共有型しつけでは「洗練コード」で話しており、強制型しつけでは



「制限コード」で話していました。「洗練コード」とは、例えば遊んでいる最中に電話がかかってきたときに、「ごめんね、ちょっと電話がかかってきたから、ちょっと待っていてくれない？ 静かにしててね」と言って話し、すぐに電話を切って、「ごめんね。終わったから、遊びの続きをしよう」という言葉のかけ方が「洗練コード」です。「制限コード」は、電話がかかってくると「静かにして」の一語で命令します。

もう少し中身を書くと、共有型は考える余地を与え、援助的なサポートが多い。子どもに敏感で、子どもに合わせて柔軟に調整する。三つのHの言葉掛けが多いです。このことで、子どもは伸び伸びと遊んでいました。

それに対し強制型しつけの親は、考える余地を与えない、指示的・トップダウン的な介入がとても多いです。情緒的なサポートも低く、4歳の子どもの向かって「左右同じ色の積み木を選ばないときれいじゃないわよ」と自分の価値を押しつけます。数学の大学院を修了したお母さんは、「線対称に並べなさい」とおっしゃっていました。また、三つのHの言葉掛けが皆無だったので、情緒的なサポートが低く、ものすごく大きな違いが見られました。

共有型しつけ30組、強制型しつけ30組を抽出したので、三つのHの言葉掛けが全くなかった子どもはおどおどして指示を待ち、お母さんの顔色を見ながら行動している様子が映っていました。この子たちが大人になったらどうなってしまうのか知りたくてたまらなくなりました。しかし、あと20年追跡調査するのは、私も90歳を過ぎてしまっていて無理ですので、別の方法を取ることにしました。

23～27歳の息子や娘を育てた家庭2,000世帯を東京都内で抽出しました。調査会社にはいろいろなデータがあるので、かなりお金を払って抽出してもらいました。そして、幼児期にどのような関わりをしたかを調べました。

息子や娘がどのような職業に就いているかについても、ウェブで回答してもらいました。弁護士、検事、外交官、医者、家裁の調査官、財務省係長などのキャリア、いわゆる国家公務員試験Ⅰ種の難関を合格した娘や息子を持つ家庭を「難関校突破組」とし、受験偏差値68以上の難関大学・学部を出ている子の家庭も加えました。すると、「幼児期に思い切り遊ばせた」「遊びの時間を子どもと一緒に過ごすことが多かった」「絵本の読み聞かせに注力したので、今も息子や娘は活字好き」「子どもの趣味や好きなことに集中して取り組ませた」家庭が

統計的に優位に多く、共有型しつげも優位に多かった結果でした。

結論は、子どもは「遊び」を通して「学習」するのです。国際比較や追跡調査、家庭訪問、ウェブ調査の結果、さらにペンシルバニアで行われた追跡調査の結果を合わせた結論は、「遊び」とは仕事に対立する概念ではなく、「怠けること」を意味するものでもありません。幼児にとっての「遊び」とは「自発的な活動」であり、ワーキングメモリー・海馬・扁桃体など頭が活発に働いている状態を指します。「『遊』とは絶対の自由と創造の世界である」と漢字学者の白川静さんは言っています。

3. 子ども中心の保育と保育者の役割

幼児との接続をスムーズにする援助について考えます。保育者の統制の大きさを縦軸とし、子どもの自発性の高低を横軸とした場合、保育者統制が大きく、子どもの自発性が低い第4象限には、一斉保育の幼稚園や保育所が入ります。小学校入学に向けた準備教育や英会話の時間を設けたり、鼓笛隊の練習をさせたり、学習を導入したりしている園があります。それに対し、保育者統制が小さく、子どもの自発性が高い第2象限には、遊びを大事にした子ども中心の保育、自由保育の幼稚園や保育所が入ります。語彙力も運動能力も、子ども中心の保育で育てている子に軍配が上がりました。

子ども中心の保育における保育者の役割は何でしょう。子どもの自発性が発揮されるのは、保育者の権威が最小限に抑えられたときです。保育者の立ち位置は子どもと対等です。子どもの視線で、かつ「レントゲンのような目で」と私の保育の師匠である堀合文子先生は言っています。堀合先生は倉橋惣三先生の「倉橋理論」を実際の場で体現した方です。ここからは堀合先生から学んだことをお話しします。

堀合先生は「保育者は現象の表面を捉えるだけでなく、心の動きやつまづきまでも洞察できなくてはならない」といつもおっしゃっています。保育園に通っていても、幼稚園に通っていても、子どもは一緒です。従って、そこで働く先生は保育士も幼稚園教諭も「保育者」と呼びます。倉橋先生もそのように呼んだ方がいいとおっしゃっています。私が保育者と呼んでいるときは、保育士も幼稚園教諭も含まれていると考えてください。

文科省の国立教育政策研究所で幼稚園の教育指導要領が改訂され、その根拠



データを出すために、幼児期特有の論理的思考力の発達について調べてほしいという依頼を受けて、この2年間研究しました。目的は、幼児期の論理的思考力の芽生えの様子を明らかにするため、遊びの中で子どもがどれほど頭を使っているかを調べることです。2年しかないため、幼稚園や保育所へ観察しに行つて調べることはできないので、国立大学法人附属幼稚園の研究紀要を内部分析することにしました。49園あるのですが、記録の不満足な4園を除き、45園を対象に分析してみました。

頭を働かせている事例を328事例取り出せました。3歳児95事例、4歳児100事例、5歳児133事例、いろいろな研究テーマのために収集された事例ですが、生活体験と結びついた論理的思考力の芽生えの姿が多く見られました。3歳児でも、4、5歳児に匹敵するほどたくさん事例を抽出できました。

頭を働かせていると判定する分類基準としては、高校生の論理的思考力の要素を使いました。「①規則性・法則性」は、例えば枝を拾って小さい順に並べる遊びなどです。「②比較・分類」は、赤や青のアサガオを別々のかごに入れ、ペットボトルに入れてよく振ると赤や青の色水ができ、それを半分ずつ混ぜるとマゼンタ色になるというような遊びが一例です。

「③全体と部分」とは「合成と分解」のことです。鳴門教育大学附属幼稚園の2月の事例を紹介すると、鳴門教育大には池があって、コイがたくさん泳いでいます。1人の子どもがコイを数え始めました。「駄目だ、動いちゃう。いいことを考えた。○○ちゃん来て」といつもの遊び仲間を3人呼んできて、池の端に等間隔で立たせました。「コイは手をたたくと寄ってくるだろう？ 自分のところに寄ってきたコイを数えたらいいんじゃない？」「うん、分かった」。みんなで近寄ってきたコイを数えました。その後、困ってしまいました。全部で何匹か分からなくなってしまったからです。合成ができずに困っているのです。

保育者はここでどうするでしょうか。ワークショップではいろいろな答えが出てきます。このとき、鳴門教育大学附属幼稚園の保育者がとった方法は、最初はどこにつまずいているのかと見守っていました。玉砂利がたくさんあるので、一つ取り上げて、最初の子どもに手渡しました。伝えたのは「これなら動かないんじゃない？」の一言だけです。子どもは受け取ってしばらく考え、「分かった」とうなずいて、自分の数だけ集めました。それを見た他の子も集め、

4人で声を合わせて数え、最後は64個になりました。「石は64個だから、池のコイは64匹いるんだ」と4人は大満足しました。これが「合成と分解」の遊びの例です。

全ての国立大学法人附属幼稚園は一日中遊んでいますから、遊びの中でこのような面白いことをしていても、それを共有できないのが残念です。全ての園でサークルタイムを設けています。いつもは当番さんが今日の遊びを報告します。立ち上がって、「今日ね、チョコレート屋さんごっこしたんだ」「どんなチョコレートを作ったの?」「イチゴにホワイトチョコがかかっているの。それからね、レーズンにホワイトチョコがかかっているのも作ったよ。それから、アーモンドが苦いチョコにくるまれているのも作ったんだ」「おいしそう。お客さんはたくさん来た?」「うん、たくさん来たよ」という会話が起きます。そのように遊びが共有されます。「明日は私もチョコレート屋さんごっこしようかな」と言う子も出てきます。

この日、当番さんたちに先生がおっしゃいました。「今日ね、面白いこと考えた人たちがいるの。その人たちに発表してもらっていいかしら」。当番さんの顔を見ました。3人の当番さんが「いいよ」と言ってくれたので、これを聞いて4人の子どもが勢いよく立ち上がりました。「僕たちね、今日、池のコイを数えたんだ。全部で何匹いると思う?」「分かんない」「64匹もいるんだよ」「ええー本当?」「僕たちね、4人で池の端っこに立って、手をたたいて自分のところにおびき寄せたの。コイって、手をたたくと寄ってくるじゃん」「うん、うん」。いつも当番さんが餌をやるときに、そうしているのです。「寄ってきたのを数えてさ、石を拾ってさ、石って動かないじゃん」「うん、うん」と子どもたちが言います。「それを拾って、その石を数えたら全部で64個あったんだ。だから、コイは64匹いるんだ」「へえ、すごい」とみんな言います。先生が石を渡してくれたことは覚えていないのです。ただ、動くものを動かないシンボルに置き換えて数える肝心なところは報告しています。

その後、先生は「いい考えでしょう。4人に具体例賞をあげてもいいかしら」と子どもたちに相談しました。「いいよ、あげる」と賛成してもらったので、丸いダンボールに金紙を貼ってリボンをつけておいたものを4本掛けてあげました。そして、みんなが拍手しました。「はい、今日はおしまい」。お母さんたちが玄関で待っているの、幼稚園バッグを肩に掛けて「さようなら」と言っ



て帰っていくという記録でした。これが「分解と合成」の例です。

「④因果推論」には、時系列因果も可逆的因果もありました。「⑤仮説の確認」をするような遊びもありました。

以上の5分類にどうしても入らないものが一つありました。大人の論理的思考要素にはない要素が「人との関係性」です。大人は自問自答して、自分の頭の中で解決策を探すことができますが、小さい子は友達の影響を見ながら、どうしたらいいかと解決策を探ることがあります。「僕、一番にやる」「どうして？私一番にやりたい」「じゃあ、じゃんけんする？」「あみだ？」「背の順がいいよ」「いやだ、背の順は」と小さい子が言います。「じゃあ、やっぱりじゃんけんしようか」と言って順番を決めるのは、「人との関係性」に入った遊びの例です。

調べてみると、どの要素も全ての年齢に出ていました。従って、もっと前から因果推論などは出ているのです。最近は乳児の研究が盛んになり、10か月を過ぎてイメージが誕生すると自分の仮説に敏感になります。ガラガラの振り方も以前とは違い、振って聞いています。取った飴もテーブルに置くと音が変わるので、びっくりしてまたやってみる。まるで実験しているように感覚と運動を反復しながら、一つの法則性や因果構造を抽出しています。

このようなことが赤ちゃんのときから起こるので、赤ちゃんのときから教育と養育の両方の要素が入ってくるということを、今日の研修で学んでほしいと思います。人との関係性は、大人にはない視点です。保育者との信頼関係に支えられ、幼児は自発的・主体的に行動しながら、人との関わりを深めていく協同性の育ちが論理的思考を働かせる基盤になっていることが、この調査を通して確認されました。

このときの保育者の援助の水準について調べてみました。まず、「見守り」とは、いつでも足場をかけられるようにすることです。「足場かけ」とは見晴らしを良くしてやることですが、決定するのは子ども自身です。「省察促し」とは、「どうしてかな」と子どもに考えてもらうことです。次に、「ここを持ったらうまく入るんじゃない？」と具体的な解決策・手立て・考える道筋を与える「誘導」があります。そして、解答や解説をトップダウンに与える「教導」があります。これらは順番に大人の統制力が強くなります。

全部調べてみたところ、国立大学法人附属幼稚園の先生方に、教導に入る援助は1回も観察されませんでした。このときは、共同で一緒に調べた仲間たち

と手をたたいて、「すごい保育やってるね」と褒めたたえました。倉橋先生は「教えや回答を特段に与えることはできたら避けてほしい」と言っています。

保育者は子どもと対等です。放任ではなく、援助（教育的営み）を与えてほしいのです。教育的な営みの与え方はあくまで援助であり、見守り、足場かけ、省察促し、誘導であって、教導はできれば避けてください。発芽しかかかっていると心理学者ヴィゴツキーは「発達の最近接領域」と呼んでいます、そこに働きかけたときに援助の効果は倍加すると、イリノイ大学の統計学者クロンバックは「適性処遇交互作用（ATI）」という概念で表しています。発達の最近接領域に、能力の発達水準に見合った処遇、教育的な働きかけや援助を与えれば相乗効果があり、援助の効果が倍化する概念がATIです。ATI保育という言葉も最近聞かれるようになりました。

発達の最近接領域を少し解説しておきます。AとBという子どもに知能テストをしました。二人とも暦年齢は5歳6か月ですが、自力で7歳レベルの問題まで解けたので、精神年齢は7歳と判定されました。普通は大人の言葉で教示を与えなければならないのですが、ここで教示の与え方を少し子どもに聞きやすい形に変えました。

例えば「赤い積み木の上に黄色い積み木を1個載せ、白い積み木を一番上に載せて塔を作ってください」というテストをするわけですが、ここで言い方を変えます。「赤い積み木を1個拾って。その上にね、黄色いののをのっけてみしてくれる？　そして、一番上に白い積み木を1個のっけて、塔みたいなのを作ってくれる？」。言っている内容は全く同じですが友達に話すような形で話してあげると、Aは9歳レベル、Bは7歳半レベルというふうに、もっと先まで解くことができました。このように、大人の援助によって可能になる水準、完成した水準と不可能な水準の間のことを発達の最近接領域と呼びます。

発達の最近接領域を働きかける前に見積もるには、手掛かりが三つあります。一つ目は保育者の保育経験です。「この子は私が3年前に担任した〇〇ちゃんみたいな子だ。取りかかりは早いけど、飽きっぽいのが玉にきず。どうすれば飽きないように続けさせられるだろうか」と、働きかける前に推定することができます。

二つ目に、模倣はいい手掛かりになります。年長組の子が基地ごっこを始めました。「僕たちもやりたい」と4歳の子が言ってきました。つまり、年長組



のすることをまねできるということは、自分では思いつかなくても、それをやるための能力が発芽しかかっていると推定できます。

三つ目に、子どもの生活歴です。「この子は次男で負けず嫌いだ」「5月生まれだからどんどん遊びを引っ張っていく」などということが働きかける前から分かります。

このように三つの手掛かりを使って、適切な援助を適時に与えてほしいと思います。そして、倉橋先生が戒めたように教導は最後に慎重に行い、言葉を抑えることも必要です。言葉を抑えることはエネルギーが要るので、若い先生方にとってとても難しいです。養成校では言葉掛けが大事だと教わっているので、たくさん言葉を掛ければ良いと思ってやり過ぎてしまいます。それでは困るのです。

堀合先生の保育から一つ紹介します。さやかちゃん(4歳)は「馬をつくって」というと、堀合先生は馬を描き始めます。「角のある馬を描いて」と言うので、「えー、これじゃないの？角」「ユニコーンって普通の馬みたいなんだけど、たてがみがなくて、角があるの。それで不思議な力を持つてるの」「キリンみたいななの？」「ユニコとかあるでしょ」「知らない。教えて？」。この間に他の子の手助けもしてから、また戻ってきます。「あなたの馬、どうなるかよく分からないんだけど、あなた、ここに描いてみて。どっかのご本にあるといいんだけど」「出てないよ。空想の動物だもの」「じゃあ、さっきの馬に角を描いてみてよ。そしたら、どんなだか分かるでしょ？」「耳がなくて、つるんとしてるの」さやかちゃんは描けないのです。

それを聞いた堀合先生は「あら、面白いわね。こうかな？　こういうの？」と試しに小さな紙片に小さく描き始めます。さやかちゃんは黙って堀合先生の手元を見ている。「こういうの？　角」と2本の角を描き込みます。「2本もないのよ」「1本？」「うん」「1本、こんなかな」。1本の角で足をぱっと開いた馬をもう一つ描きます。これで三つ目です。「走ってんじゃない。止まっているのって言ったでしょ？」。そんなことは言っていないんですが、4歳児の特徴です。でも、堀合先生は「そんなこと言っていないわよ」などとおっしゃいません。それでは強制型しつけのおばあさんみたいになります。堀合先生は共有型しつけですから、これを受け止めて「これじゃ駄目？」と最初に描いた馬に1本の角を描き加えます。この馬は足を閉じて立っています。「羽があるの」「ああ、

ペガサス？」と言うと、黙って考えています。「目をつむるとしわがあるの」「よく見てのね」。三つのHの言葉が掛けられました。

もう一度、羽を描き込むスペースのある紙に、1本の角で立ち止まっている馬を描き直しました。「じゃあ、その馬は羽があるのね?」。これを聞いたさやかちゃんは、クレヨンとはさみを取りに行き戻ってきました。「ユニコーンは?」「描いたわよ。それ、どうでしょう」。描き直した馬には羽が描き込まれていません。「ん?あと、羽?」「羽は後でつけるよ」「いい」と言って、ささっと描き加えました。さやかちゃんがそのとき作ったペープサートは、足を閉じて立っていました。

私は、この保育を見ていて分からないことが一つありました。羽を描き込むスペースがある一番大きな画用紙を持ってきて描いたにもかかわらず、羽はまだ描き込んでいなかったのです。「羽は後でつける?」とおっしゃった言葉の意味が分かりませんでした。必ず保育カンファレンスをするので、この言葉掛けの意味が分かりました。堀合先生の頭の中には、羽は別の紙で2枚作り、両方の胴体から付ければ、持って歩くときにひらひら動くようなダイナミックなペープサートができるというイメージがありました。そこで、ヒントを出してみました。しかし、堀合先生は「さやかちゃんはまだこれを想像できなかったのです、早過ぎたのだと思って引っ込めたのです」とおっしゃいます。私なら「さやかちゃん、別の紙で作ってさ、胴体から付ければひらひらするような馬が作れるんじゃない」と言ってしまうそうです。

それではやり過ぎなのです。大人が子どもに代わって考えてしまったら、子どもの考える力は育ちません。大人が子どもに代わって創造してしまったら、子どもの想像力は育ちません。大人の親切は、子どもの迷惑であると考えなければなりません。実際、3学期になると、堀合先生が作ってくれたように鳥に羽を付けて、はばたい見えるものを作るようになっていきます。とにかく言葉を掛け過ぎないことが大事なのです。堀合先生は「前を見ている、横の子どもの体の動きが見えるのです。後ろの子どもの心から動きが見えるのです。その神経の使い方が保育者です。保育者はすごいですよね」とおっしゃっています。

このような自由保育では、保育計画の考え方が問題になります。堀合先生は「原則としての保育計画にとらわれないで」とおっしゃいます。年間計画、月



間計画、週案、日案にこだわると、子どもの姿が見えなくなります。保育計画は子どもに体験させたい活動の目安ぐらいに考えてください。活動に取り組む時期も期間も緩やかに、一人ひとりの子どもの興味・関心・発達水準に合わせて、1年間かけて体験できればいいというぐらいに考えてほしいのです。監査が来たとしても、「確かに計画はありますが、お子さんは12か月分の個人差があります。その一人ひとりが体験できる項目ということで時間の長さを長く取っています。年間計画・月間計画などの保育計画は、子どもの発達水準に合わせて実践しています」とお話しください。

また、「楽習のレシピ」を実践することです。「カリキュラム」や「指導計画」では硬過ぎます。子どもの主体性や自発性を出発点にして、遊びの材料を準備してください。

また、子どもが遊びに熱中できるように、保育者は子どもに寄り添い、援助してほしいと思います。

3

次期学習指導要領の目玉

〔中教審答申 2016年8月26日〕

学びの質の改善を目指す

何を学ぶか⇒どのように学ぶかという視点

⇒子どもが主体的・能動的に授業に

参加するアクティブ・ラーニングが目玉

**子ども中心の保育の場では、既に
プレイフル・アクティブ・ラーニング
(楽習=遊び)が実践されている！**

図2 アクティブラーニング

保育記録は若い先生方にとって少し荷が重いですが、その意味と意義は、その日の実践を振り返るための記録であること、明日のエデュケアの質向上のため

め的手段（メモ、写真、ビデオなど）であること、そして保護者と共有する手段であることだと考えるといいと思います。何よりも、先生方一人ひとりが適応的エキスパートに成長してもらうために保育記録があると考えてはどうでしょう。目の前の子どもの発達の最近接領域に働きかけ、援助や足場を掛けられるようにしてほしいのです。

達人には二つのタイプがあります。日常的エキスパートとは、ひととおり手続きを理解していて、このようなときにはこうすればいいということが分かり、無難に課題を解決できるエキスパートです。覚えた手順を使って、そのとおりにきちんと仕事をするタイプで、世の中にはこのような仕事が必要な分野もあります。

しかし、保育の仕事はそうではなく、適応的エキスパートでなければなりません。単に手続きが分かるだけでなく、いろいろな場面に活用・応用できる心的モデルをつくり上げ、臨機応変にいろいろな状況や課題に対応できるエキスパートのことで。陶芸家がこれに当てはまります。釉薬のかけ方、外気温、窯の温度、土の練り込み方などを全て考慮に入れ、今までにないデザインをつくっていきます。保育の仕事は、まさにアーティストです。

自分の考えや自分のしていることをはっきりと言語化でき、自分の能力の限界や欠点までも評価したり、状況に応じて手持ちの手続きを修正し、より適応的なものに変えたりできることを適応的エキスパートといいます。保育者は適応的エキスパートとなり、単に手続きが分かるだけでなく、目の前の子どもや状況に合わせて、子どもへの援助の仕方を修正し、より適応的なものへと変えてほしいと思います。そのためには、先輩や同僚から学んでください。忙しくても、5分でいいのです。保育カンファレンスを設け、子どもたちについて話し合う時間を設けてほしいと思います。

子どもの思考力や想像力を育む援助を整理しておきます。第1に、子どもに寄り添い、かわいがって、安全基地になってあげてください。第2に、その子自身の進歩を認め、褒めてあげてください。他の子とは比べないでください。「褒める・励ます・視野を広げる」の「三つのH」の言葉を掛けてあげてください。第3に、生き字引のように余すところなく、定義や解説を与えないでください。第4に、裁判官のように判決を下さないでください。禁止や命令ではなく、「○したら?」「僕、したくない?」と提案の形で選べるのが大事です。第5



に、子ども自身が考え、判断する余地を残すことです。このような関わりの中で、自分で考える力（自立的な思考力）や、PISA調査の学力基盤力になる創造的想像力が育ちます。

最後に、子ども中心の保育とかけて、私は「盆栽」と解きます。その心は「松（待つ）」ことです。心の声をしっかり聞いてあげてください。すると、子どものつまずきが見えて、洞察力が湧いてきます。そして、子どもの考えが先に進むための足場をかけてあげることができます。スキヤフォールディングという概念です。足場は、教育心理学者のブルーナーが『教育の過程』という著書の中で初めて提唱した概念です。

大人（教師・保育者・親）は足場をかけることはできますが、足場に登るか登らないか、足場に登ってどのような作業をするかを決める主人公は子どもです。聞くにしても、耳を門の中に閉じ込める「聞く」ではなく、十四の心を込めて耳を澄ます「聴く」ことで、子どものつまずきを見抜いてください。うまく足場をかけてあげれば、4～5歳の子どもでも、科学者がたどるのと同じような仮説・検証のプロセスを自力で進むことができます。その事例を最後にご紹介します。

渡辺万次郎さんは、秋田大学学長も務めた理科教育の先生で、当時4～5歳のお孫さんとのやりとりを『理科の教育』という雑誌に載せていました。「私はかつて幼稚園の二児を近郊に伴った。彼らは『みやこぐさ』の花に注意を引かれたが、その名を問うほかに能がなかった。当時、私どもの菜園には、同じ豆科の『えんどう』の花が咲いていたので、私は名を教えるかわりに、その花をもって帰り、おうちでそれによく似た花を見出すようにと指導した。彼らが帰宅後、両者の類似を見出した時には、小さいながらも自力に基づく新発見の喜びに燃えた。やがて一人は『みやこぐさ』について、『これにもお豆がなるの?』と尋ねた。それは誰にも教えられない、独創的な質問であった。

子どもの質問に答えることはできますが、質問の仕方を教えることはできません。「えんどう」は花が咲いた後に豆がなるので、花の類似から類推を働かせ、まだ名前を知らないこの花にも豆がなるのかという質問です。だからこそ、それに答えず、足場をかけました。

「私はそれにも答えず、次の日曜に彼らに現場で確かめることを提案した。次の日曜に彼らがそこに小さな『お豆』を見出したとき、そこには自分の推理

の当たった喜びがあった。秋が来た。庭には萩の花が咲いた。彼らは萩にも豆のなることを予測した。彼らは過去の経験から、いかなる花に豆がなるかを自主的に知り、その推論を独創的にまだ見ぬ世界に及ぼしたのである」

素晴らしいレッスンです。星の王子さまが帰っていきますので、私のお話を終えたいと思います。星の王子さまが地球に着いたとき、小さなきつねが言いました。「この世で一番大切なものは目に見えないんだよ」。この大切なものを見抜く力、創造的想像力を育むのは、乳幼児期から児童期だけでなく、私たち大人、私のような高齢者にとっても発達課題であると思います。どうぞ先生方、子どもたちをかわいがり、子どもたちの創造的想像力を育む保育を明日から実践してほしいと思います。ご清聴ありがとうございました。